

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

北海道外科雑誌 (1988.12) 33巻2号:7~12.

北海道における胃疾患の現況
—過去10年間のアンケート結果から—

矢吹英彦、江端英隆、松田年、水戸迪郎

北海道における胃疾患の現況

— 過去10年間のアンケート結果から —

矢吹 英彦 江端 英隆 松田 年 水戸 廻郎

要 旨

1978～1987年の10年間の道内の胃疾患を前半5年（以後前期），後半5年（以後後期）に分けアンケート調査した。胃癌における早期癌の比率は前期34.4%，後期42.8%である。A，M領域癌の早期癌比率は約50%であるが，C領域癌は30%以下であった。Borrmann IV型胃癌の比率は前後期とも約10%であり殆ど変化がなかった。手術は全摘例，他臓器合併切除例の増加など拡大の方向にあるが，非切除例が10%前後ある。年齢別では70歳代以上に増加傾向があった。悪性リンパ腫のリンパ節転移率は約40%，平滑筋肉腫の肝転移率は約6%，リンパ節転移率は約23%であった。胃十二指腸潰瘍の手術総数は激減しているが，穿孔例の手術数は不変である。

Key Words：胃疾患アンケート調査，胃癌，悪性リンパ腫，平滑筋肉腫，胃十二指腸潰瘍

はじめに

本道において過去10年間に外科的治療法の対象となった胃疾患を各施設より集計し，胃癌の現況，非上皮性腫瘍の動向，H₂ ブロッカー登場後の胃十二指腸潰瘍手術の質的变化などの調査を行なったので，その概要を報告する。

調 査 法

道内の主だった50施設に“胃疾患治療の現況”に関するアンケートを発送し23施設からご協力をいただいた（回答率46%）。

調査法は過去10年の各施設における胃疾患手術症例を前期と後期に分け，それぞれ胃癌，悪性リンパ腫，その他の非上皮性腫瘍，胃十二指腸潰瘍の最近の10年間における変遷を追った。

結 果

1. 胃癌

1) 肉眼分類

記載のあった前期症例3,844例，後期症例4,697例の肉眼分類を示す（図1）。前期症例中早期癌の比率は34.4%，後期では42.8%であった。Borrmann IV型胃癌の比率は前期の10.6%から9.8%へと僅かに減少し

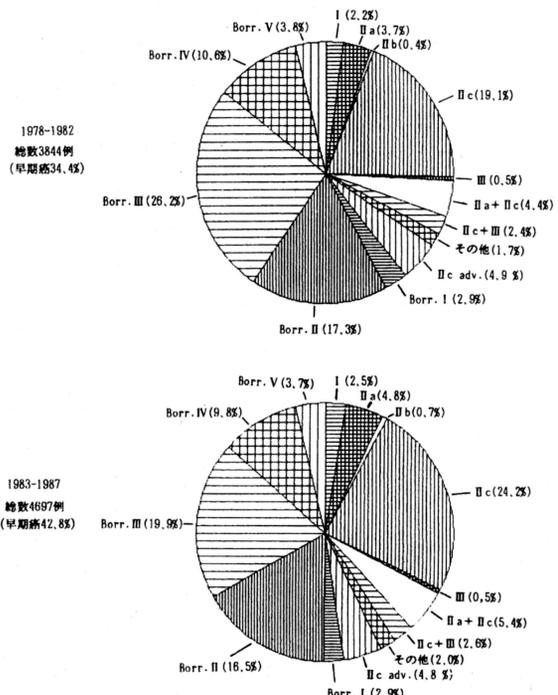


図1 肉眼所見

ていた。

2) 局在

局在を記載していた症例は前期3,765例、後期4,549例であった。このうち前期においてはC領域を中心とした胃癌のうち早期癌の比率は24.2%、M領域42.9%、A領域38.9%であったが、後期においてはそれぞれ28.1%、53.7%、46.1%であった(図2)。

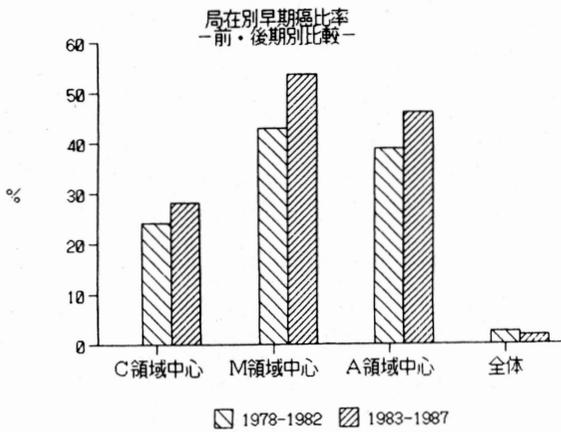
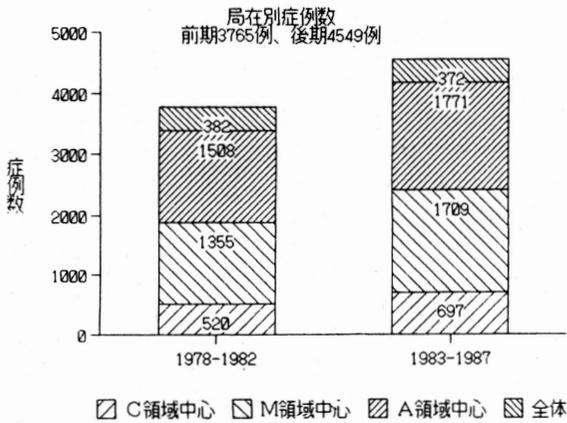


図2 局在

3) 年齢分布

年齢分布の前後期別の比較では、前期に比べ後期では40代の胃癌症例は15.8%から12.4%へと減少しており、70代以上の比率が19.0%から23.0%へと増加してきている(図3)。

4) 術式

記載のあった切除症例数は、前期3,554例、後期4,414例であった。前期では近位側切除例3.4%、遠位側切除例72.3%、全摘例22.6%、その他1.7%であり、後期ではそれぞれ3.4%、70.4%、24.7%、1.4%であった(図4 a)。また他臓器合併切除例の検討では摘脾例が前期では4.8%、後期では5.5%、以下脾臓合併

切除例が9.6%、9.5%、肝切除例0.5%、0.6%、結腸切除例1.0%、1.8%であった(図4 b)。このうち吻合例、試験開腹例を同時に記載してあった症例数は前期3,183例、後期3,852例であったので、吻合のみの全手術例に対する比率は前期7.0%、後期5.0%であり、試験開腹例のそれは前期6.4%、後期4.2%であった。

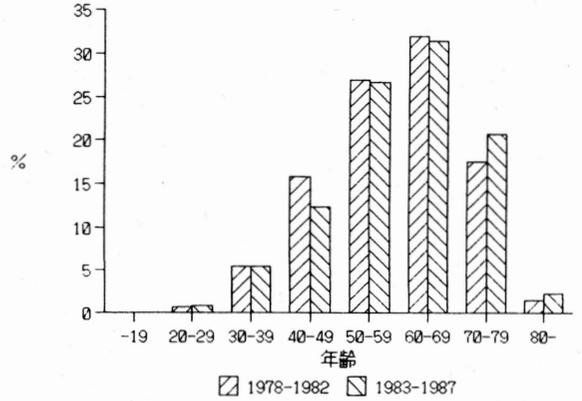


図3 年齢分布の比較
前期3964例、後期4772例

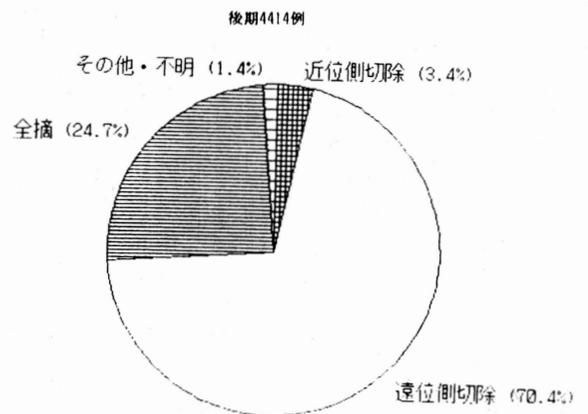
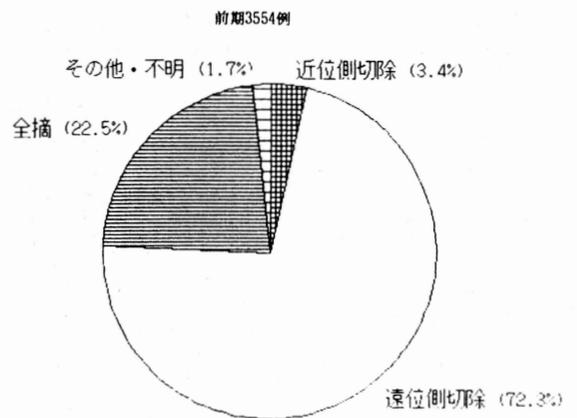


図4 a 術式の変遷

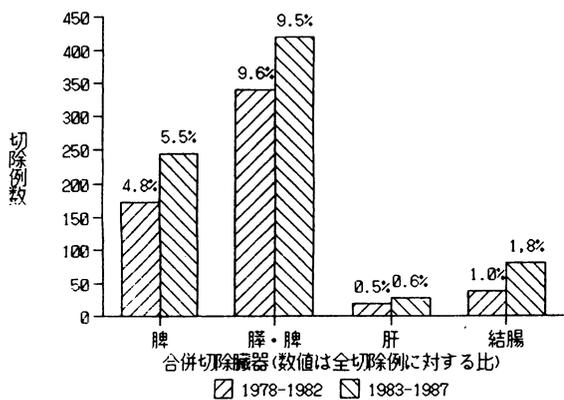


図4b 合併切除例

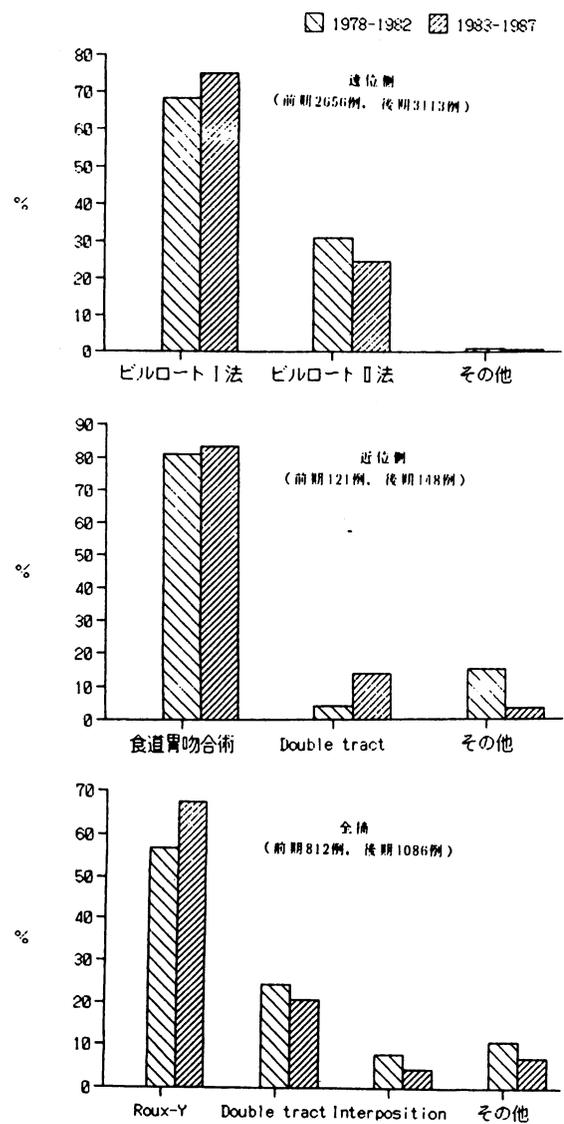


図5 再建法

5) 再建法

遠位側切除例では前期においては68.3%がビルロー

トI法, 30.9%がビルロートII法, その他0.8%であり, 後期ではそれぞれ74.8%, 24.7%, 0.5%であった。近位側切除例では前期では食道胃吻合81.0%, double tract法が4.1%, その他14.9%であり, 後期ではそれぞれ83.1%, 13.5%, 3.4%であった。全摘例では前期ではRoux-Y法56.8%, double tract法24.5%, Interposition法7.9%, その他10.8%であり, 後期ではそれぞれ67.6%, 20.6%, 4.6%, 7.2%であった(図5)。また, その他・不明例が前期には112例3.0%, 後期では115例2.6%あった。

6) 術後管理

表1の形式でアンケートを行った。回答した21施設のうち, 全摘・近位側切除例では14施設がほぼ全例にIVHを施行していた。遠位側切除例ではほぼ均等に分かれた。蛋白製剤の使用は, できる限り使用を制限していると答えた施設が14例あった。

2. 胃悪性リンパ腫

前期における悪性リンパ腫手術例は41例であり, 全摘は21例51.2%になされており, 普通切除12例29.3%, その他8例19.5%であった。リンパ節転移例は14例であり34.1%であった。後期では手術例数は65例あり, 全摘44.6%, 普通切除41.5%, その他13.8%であった。リンパ節転移例は46.2%であった。全体では悪性リンパ腫106例中リンパ節転移率は44例41.5%であった(図6)。全生物手術例中に占める比率は前期では1.0%, 後期では1.3%であった。

3. その他の非上皮性腫瘍

前期における手術例数は68例であり平滑筋腫30例, 平滑筋肉腫19例, 迷入腺9例, 神経鞘腫4例, その他6例の順であった。後期では101例中平滑筋腫59例,

表1 術後管理について

1. IVHは	
1) 全摘・近位側切除の	
①ほぼ全例に施行	14施設
②半数以上に施行	3施設
③1/3あるいはそれ以下	4施設
2) 遠位側切除例の	
①ほぼ全例に施行	6施設
②半数以上に施行	7施設
③1/3あるいはそれ以下	8施設
2. 蛋白製剤について	
①積極的に使用	6施設
②適応を制限	14施設
③殆ど使用していない	1施設

(回答21施設)

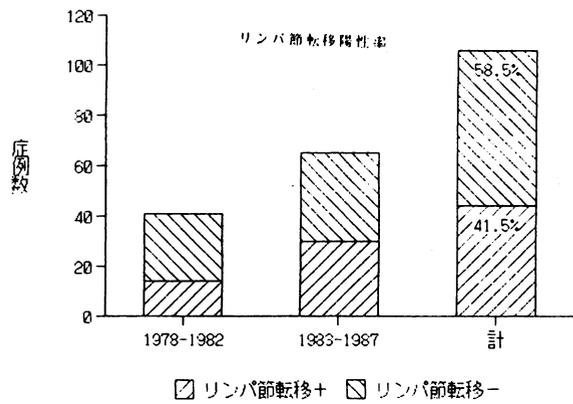
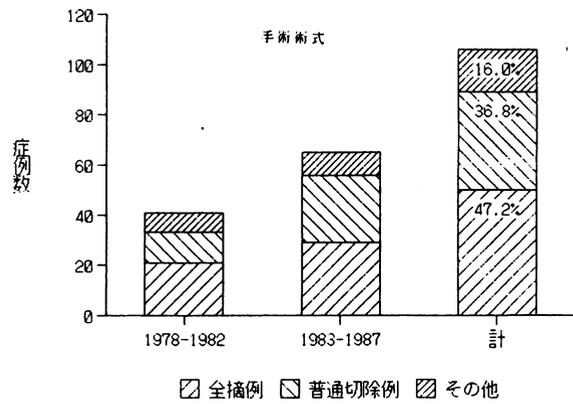


図6 胃悪性リンパ腫

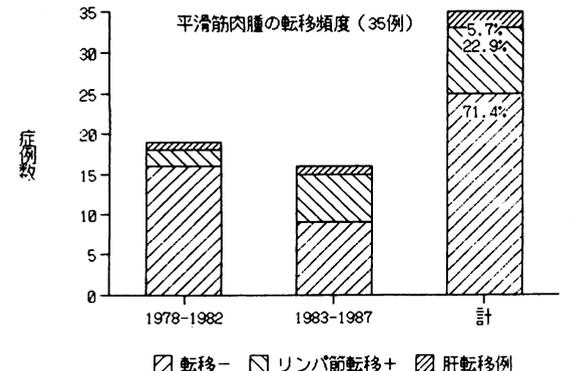
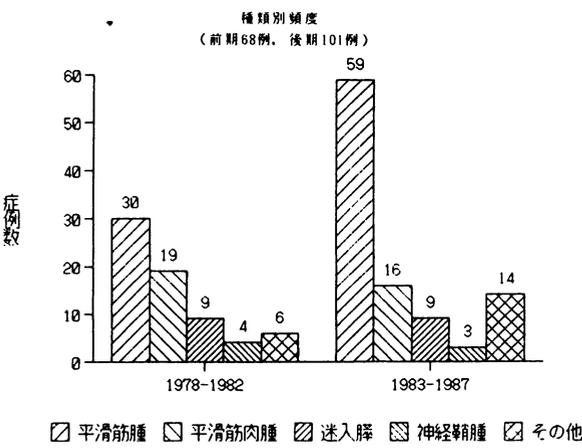


図7 その他の非上皮性腫瘍

平滑筋肉腫16例, 迷入臍9例, 神経鞘腫3例, その他14例であった。平滑筋肉腫35例のうち肝転移例が2例5.7%あり, リンパ節転移例は8例22.9%であった(図7)。

4. 胃十二指腸潰瘍

1) H₂ ブロッカーと手術症例数

表2のアンケートにてH₂ ブロッカー登場後の手術数の変遷を調べた(重複あり)。結果は, 激減したと回答した施設が15施設, 不変1施設, 不明1施設, 緊急手術は不変と回答した施設9施設であった。

2) 手術数

前期の手術数は809例, 後期は509例であった。前期における手術理由は出血が218例, 穿孔が183例, 狭窄111例, 癌との鑑別困難64例, 難治性・その他233例であり, 後期ではそれぞれ160例, 188例, 57例, 23例, 81例であった(図8)。

表2 胃十二指腸潰瘍アンケート
H₂ blocker 登場後手術数は

	施設数
激減した	15
不変	1
増加した	0
不明	1
緊急手術は不変	9

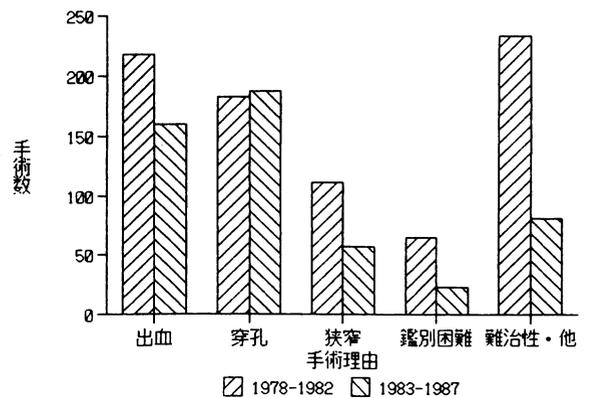


図8 胃十二指腸潰瘍手術例

考 察

1. 胃癌

胃癌手術の最近10年間の北海道の動向を, アンケート調査に基づいて肉眼分類, 局在, 年齢分布, 切除術式, 再建法別に検討した。肉眼分類上前期(1978~

1982年)の5年間では早期癌の比率は34.4%であったが、後期(1983~1987年)の5年間では42.8%に上昇していた。しかしBorrmann IV型胃癌の比率は10.6%から9.8%へとわずかに減少しているのみであり、依然としてこのタイプの胃癌の早期発見が困難であることが示された。また部位別にみた早期癌の比率は、M領域を中心としたものでは前期の42.9%から後期では53.7%と半数以上が早期癌であった。A領域でもほぼ同様の結果であり、38.9%から46.1%へとほぼ半数が現在では早期癌となっている。しかしC領域癌では前期の24.2%から28.1%へと早期癌の発見率は着実に向上しているものの、依然として2/3以上が進行癌のままである。年齢分布からの分析では、近年高齢者の癌患者の増加が全国的に問題になっているのと同様、本道でも40歳代の胃癌患者の減少と、70歳代以上の患者の増加が目だってきている。また術式別の検討では、切除できずに終わった比率は前期の13.4%から9.2%へと、若干ではあるが改善している。他臓器合併切除例も15.9%から17.4%へ、遠位側切除例が若干減って全摘例が増加するなど、道内の最近10年間の動向は、全体に手術の拡大に向かっているものといえる。再建法では、遠位側切除例においてはビルロートI法がより増加している。近位側切除例では食道胃吻合が殆どであり、全摘例ではRoux-Y法が67.6%、double tract法20.6%、Interposition法4.6%などであった。術後管理の主体は、全摘・近位側切除例にはほとんどの施設がIVH管理をしており、遠位側切除例では施設によって様々であった。また最近の医療事情を反映してか蛋白製剤の使用はできる限り制限していると述べた施設が多かった。これらの結果を全国胃がん登録調査報

告¹⁾と対比すると、全国平均の早期癌の比率は27.0%であるのに対し、本道のそれは現在では約43%、また切除率は全国平均85.06%なのに対し91.8%といずれも全国平均をうわまっていた。

2. 胃悪性リンパ腫

全道から106例が集計された。高木ら²⁾によれば本疾患のリンパ節転移率は55%であったとしているが、本道では44例41.5%であり、現時点では約半数はリンパ節転移があるものと考え郭清を決定すべきと思われる。また術式別では約40%が全摘されていた。

3. その他の非上皮性腫瘍

頻度的には平滑筋腫が最も多く、以下平滑筋肉腫、迷入腺、神経鞘腫、その他の順であり信田ら³⁾の報告とほぼ一致した。平滑筋肉腫は35例が集まり、肝転移率は5.7%、リンパ節転移率は22.9%であった。本疾患の切除の際に参考になるものと考えられる。

4. 胃十二指腸潰瘍

1982年1月にH₂ブロッカーが登場している。従って前期の5年はほぼこの薬の恩恵に預からなかった時代であり、後期の5年はこの薬の評価の時代といえる。各施設の回答によれば、H₂ブロッカーの登場以来胃十二指腸潰瘍の手術症例は激減したが緊急手術例は変化していないとのことであった。これらの裏づけとして緊急手術の2大原因である出血、穿孔例をさぐると、前期においては出血例218例、穿孔例183例の計401例であり、後期ではそれぞれ160例、188例の計348例であった。この様に緊急手術例のうち、穿孔による手術数はかえって増加していることがわかる。出血例が減少しているのは近年発達した内視鏡的止血術のためと考えられる。またそのほかの狭窄、癌との鑑別困難、

表3 アンケート協力施設名 (23施設)

北大医 第2外科	市立札幌病院 外科
網走厚生病院 外科	北大医 第1外科
国立療養所道北病院 外科	留萌市立総合病院 外科
札幌厚生病院 外科	旭川厚生病院 外科
自衛隊札幌病院 外科	日鋼記念病院 外科
国立函館病院 外科	岩見沢市立総合病院 外科
函館協会病院 外科	国立札幌病院 外科
市立土別総合病院 外科	市立小樽病院 外科
斗南病院 外科	札幌通信病院 外科
国立療養所西札幌病院 外科	札幌医大 第1外科
市立釧路総合病院 外科	旭川医大 第2外科
砂川市立病院 外科	

(順不同)

難治性などの理由による切除例は著明に減少しており、診断能の向上、H₂ブロッカーの効果と考えられ、各施設の回答が裏付けされた。青木ら⁴⁾の報告でもほぼ同様であったが、本道では特に穿孔例の手術数のみが減少しておらず、最近登場したプロスタグランジン製剤、防御機構増強胃潰瘍治療剤などの効果の判定を待ちたいところである。

む す び

北海道23施設で過去10年間に外科的治療を受けた胃疾患の概要をまとめた。

稿を終えるにあたり、ご多忙中にも関わらず今回の調査に快くご協力いただいた各施設の方々に深甚なる感謝の念を表し、お礼の言葉にかえさせていただく(表3)。

文 献

- 1) 国立がんセンター：全国胃がん登録調査報告。第25号，東京，1988。
- 2) 高木国夫，山本英昭，岸本秀雄，他：胃悪性リンパ腫の手術的治療と成績。胃と腸，16：493，1981。
- 3) 信田重光，長島金二，荒川征之，他：消化管の非上皮性腫瘍について—その臨床面よりの考察—。胃と腸，10：861，1975。
- 4) 青木照明，秋元 博，柏木秀幸，他：消化性潰瘍—内科的治療か外科的治療か。胃と腸，21：1089，1986。

Summary

Present status of the surgical treatment of gastric diseases in Hokkaido.

Second department of surgery Asahikawa Medical College

Hidehiko YABUKI, Hidetaka EBATA
Minoru MATUDA, Michio MITO

The last ten years (1978 - 1987) surgical gastroduodenal diseases in Hokkaido were collected by the questionnaires. The first half of 5 years, overall early gastric cancer ratio was 34.4%, and later half of 5 years, 42.8%. Lower and middle gastric cancer now had 50% of early cancer. But upper side was still over 70% of advanced cancer. Scirrhus cancer was about 10% and almost no change between first and later 5 years. The later half of 5 years, operation became extended, but 10% cases were unresectable for the present. As a age distribution, seventh and eighth decades were increased recently. Malignant lymphoma was caused by 40% of regional lymphnode metastasis. Leiomyosarcoma had 23% of lymphnode metastasis and 6% of liver metastasis. Number of surgical cases for gastroduodenal ulcer remarkably decreased after the introduction of cimetidine, but perforation cases were unchanged especially in Hokkaido.